

鶴鵲樓に登る

王

之

渙

白日山に依つて尽す

黄河海に入つて流る

千里の目を窮めんと欲し

更に上る一層の楼

【作者】 王之渙(六八八〜七四二)盛唐の詩人。字は季陵(きりょう)。山西省新絳(しんこう)郡の人。一時役人をしたこともあつたが生涯の

大部分を在野で過ごした。王昌齡、高適(こうせき)と親しく辺塞詩人として有名である。

【語釈】 * 鶴鵲樓:山西省永濟県の黄河を望む地に立っていた三層の楼。鶴鵲(こうのとり)がここに巢を作つたのでこの名があるという

* 白 日:太陽。 * 黄 河:中国の二大河山の一つ、黄色の沙をふくんで流れるのでこの名がある。

* 千里目:千里のかなたまで見通せる眺望。 * 一層楼:楼の一階上。

【通釈】 鶴鵲樓に登ると光り輝く太陽も、西の山々によりかかるように沈んでゆき、眼下には滔々(とうとう)と黄河が東の海に流れ続けている

この雄大な眺めを千里の彼方まで見きわめようとして、更にもう一層上へと登ってみるのである。